

〔追加〕

高知県農民医療運動断章

——土佐大衆医療組合——

青 木 郁 夫

はしがき

この小文は高知県における農民医療運動の一側面を綴ったものである。全国厚生農業協同組合連合会『協同組合を中心とする 日本農民医療運動史』（1968）にみられるように、農民医療運動の中核に位置付けられているのは、「産業組合」として法に拠って認可された医療利用事業を行う協同組合の歴史であるが、協同組合による農民医療運動には農民組合運動を基盤として創り上げられた任意的組合＝産業組合としての認可を得ていない協同組合組織によるものもあった。高知県高岡郡では、別稿「医療利用組合群像〔Ⅲ〕」で取り上げた高陵利用組合昭和病院が事業区域に包括していなかった高岡町に、全国農民組合を基盤として「土佐大衆医療組合」が1935年5月に設立された。本小文ではこの土佐大衆医療組合を素描する。

高知県高岡郡内における農民医療運動 ——土佐大衆医療組合

高知県高岡郡高岡町では全国農民組合を基礎として岡崎精郎、板原伝らによって土佐大衆医療組合が35年5月に創設された。高岡郡では須崎町を中心に25町村を事業区域とする産業組合である広区域単営医療利用組合＝高陵利用組合昭和病院がすでに組織されていた（28年3月認可、29年8月事業開始）が、高岡町はその事業区域ではなかった。土佐大衆医療組合と高陵利用組合との間にどのような関係があったのかについては、残された資料からは全く分からな

いが、同じ郡内における「医療組合」運動として、「土佐大衆医療組合」の歴史を書き留めておきたい。

32年に賀川豊彦・新渡戸稲造らが主導した東京医療利用組合の設立認可がなされると、その影響もあって、農民運動、とりわけ全国農民組合総本部派が「協同組合的活動」運動の重要な領域として「医療組合」運動にも取り組む方針をもつようになった。34年3月11～13日に開催された第13回全国農民組合全国大会において、第1日終了後「医療組合に関する懇談会」は、八戸診療所の岩淵健一君と（新潟）三条医療組合の白井康太郎君とが経験を語り、それを中心に種々論議した末、各地医療組合の連絡委員を設けることを打ち合わせた」〔法政大原社研、1968, p.33〕。この時期にはすでに、青森県八戸、新潟県中越・南蒲原・五泉、千葉県印西・印東などに「医療組合」が設立されていた。

全農高知県連合会（本部高岡郡高岡町）は、全国大会直前（3月1日）に開催された第2回県連合会大会において「医療組合運動に関する件」を論議し、その方針に基づいて「無産者診療所」設立の運動を進めた。しかしながら、33年改正医師法が非医師による医療機関の開設を地方長官による許可制としたために、農民組合による診療所の開設は極めて困難な状況となった。そこで、神戸から医師松島栄蔵を薬品及び診療機器持参で招き、医師自身の「開業」による診療所として34年7月15日に高岡町に大衆診療所を開設した（医薬品及び医療機器については「土佐医療組合」が借入し、その借入料を支払い、5年後に所有権を移転することとした。医師には

家族生活費として月250円を支払い、さらに「実費診療」による診療収入を支払う。但し診療収入が年間で1ヵ月平均1,100円を超過した場合は1,100円以上の支払いと100円超ごとに3割以内の賞与を支給する¹⁾。診療所の経常費は医療組合組合員1世帯あたり月20銭の会費でまかなうこととした。そのため農民組合は組合員の拡大・組織の確立に力を尽くした。

代表者であった岡崎精郎(29年吾川郡秋山村村長, 32年仁西争議で有罪下獄, 33年村長失格, 34年全農第13回大会で中央常任委員に選出, 35年県会議員)は、非医師である「土佐医療組合」が設立する「大衆診療所」の認可を警察部長や知事に要請し続けた。また、岡崎はすでに開業した診療所の経営困難な状況を支えるために、個人財産を注ぎ込んだ(岡崎の県立城東中学(旧第一中学)時代からの友人であるドイツ・フランス文学者片山敏彦も医療器具などを寄贈している)[岡崎鶴子, 1999, pp.141-6, pp.232-3]²⁾。岡崎の「貴く生さん」の思いが通じたのか、翌35年3月18日に知事が組合員千人以上を組織することを条件に「土佐大衆医療組合」の診療所開設を認可すると明言したことを受け(この時点で組合員は650名であったという)、3月20日の第3回県連合会大会で再度「医療組合に関する件」を決議して「医療組合」設立運動を進めた結果、5月17日には「土佐大衆医療組合」の創立大会を開催することができた[岡崎和郎, 1999, p.253, p.302]。「実費診療所」(治療費の2割を組合員には減額[板原伝, 1980, p.149])である「土佐大衆診療所」は、7月に知事の認可を受けた。「従業員医師1名、看護婦2名、会計1名、医療組合員1,100名([同上])によれば、1,034名)」規模であると報告されている[法政大原社研, 1973a, p.142]。

医療組合「土佐大衆診療所」は組合員の健康を守るうえで重要な役割を果たしただけではなく、「全農が主体となって大衆診療所を開設したが、これは未組織との親密の度合いを急激に増している」と評価された[法政大原社研, 1973b, p.184]。しかしながら、農民運動に対す

る抑圧が強まるのに従って、診療所の経営も困難を来し、医師も3交代し、その確保も容易ならざる状況に置かれた。全農の資料にも、36年2月の「中央常任委員会議事録」に「土佐大衆診療所に関する件、医師招聘に対して積極的支持を為すこと」[法政大原社研, 1976a, p.2]と記されている。それでも、県連合会は「前(35)年は、凶作で、幡多郡、安芸郡に新組織が出来た。高知市付近の平野にも五百名位の争議が起きて、そこへも、組織はのびんとしている。全農躍進のために、支部代会議が四月末にもたれ、秋の準備がなされる。現在の高知は、診療所、組合経営の再建活動に猛烈に闘っている」と報告している[法政大原社研, 1976b, p.24]。ところが、農民組合の奮闘にも係わらず、「人格識見兼備の医師の欠乏且財政破綻のため」36年3月には診療所は閉鎖のやむなきに至った。加えて、38年1月、組合長岡崎精郎が急逝したため、彼の「社会奉仕」とさえいわれた土佐大衆医療組合は2月9日に「土佐大衆診療所及土佐医療組合の閉鎖並解散」を決定し、清算に入った。医療組合側のやや一方的な清算のあり方に、旧医師との間の関係は一層ぎくしゃくすることになった[岡崎鶴子, pp.233-5]。

注

- 1) 松島医師との関係もそれほど良好であったわけでもないように窺われる。岡崎の知事に対する設立認可要請状(35年3月17日付)のなかに、医療組合診療所の開設認可が得られず、「大衆を待たせる為に努力数しれず、一安(?不安…引用者)のうちに過ごす医師(契約せる)を落ち着かす為になみなみならぬ苦心を重ね一身一家を犠牲として自身ついに神経を犯さるるに到り」と書かれている。松島医師は35年4月まで在職し、5月には帰郷したとみられる。松島医師の側は、大衆診療所の「財政破綻のため閉鎖解散」後の組合側の財務処理に関して、対する岡崎和郎(精郎の実弟)宛書簡のなかで、「兄君御在生の当時深く医業を羨望せられ候にも、凡そ稼業としての自己の職業として決して芳しきものに非ず。未だ諸種のご存知なき幾多の欠陥あり、心中怨嗟する事少なからず」とまで述べている。土佐大衆医療組合解散後の清算にあたっても、旧債について松島医師との間では折り合い

Oct. 2016

高知県農民医療運動断章

がつかなかった[岡崎鶴子, 1999, p.233]。

- 2) 岡崎精郎は片山敏彦の紹介があって倉田百三と接することになり、倉田が編集し発行していた『生活者』に「精神統一に就いて(書簡)」(11号, 27/3)を始めとして、「私は折りにふれて次ぎの如く歌ふ(詩)」(19号, 28/1), 「我が感想(感想)」(20号, 28/2), 「日々の断想(感想)」(20号, 28/3)など、一時期、次ぎ次ぎに寄稿している。片山敏彦は創刊号の「自分に言ふ言葉(感想)」(26/5)など数多くの論考を寄せている。さて、「拙稿, 1995」において、芥川龍之介が「文芸的な, 余り文芸的な」(1927)において「近來の造語『生活者』」云々と述べていることに触れた。芥川が「生活者」という言葉に注目するに至ったのは、おそらく、26年5月に創刊されたこの思想・文芸雑誌『生活者』に拠るのであろう(通巻第54号, 29/12をもって終刊)。この雑誌は「生活者発行所」を発行所としているが、奥付では、同時に岩波書店が発行所であった(これは「発売元」という意味か)。「発刊の言葉」によれば、「我々は享けた生命を愛する」ことから発して「我々は生命に対して敬虔なる人々の様々なる歩み, 種々な境遇から生ずる体験からの声, 色々な立場と視点からの考察の結果等をもっと知らねばならぬ」そこに雑誌『生活者』を発行する目的があるとする。そして、われわれの内面生活を取り扱うため、自ずから「宗教的芸術的傾向」を帯びるとしたうえで、「パンの権利の真実の根拠, 認識の最深の依拠, 教養の最後の基礎等とはもとより『生活者』の取扱はずにはゐられない重要な問題である」としている。芥川自身は、雑誌の目次からみる限り、この雑誌に何も執筆していないようであるが、第12号(27/4)には、吉田泰司による彼の作品「河童」(『改造』3月号)の批評が掲載されており、そのことに関する吉田宛て書簡が残されている[芥川龍之介, 1958, p.90]。このことからして、上記の

ように考えてもよいのではないだろうか。第53号(29/11)には唐木順三が「芥川龍之介に於ける人間の研究」を執筆している。

参考文献

- 芥川龍之介(1958)『芥川龍之介全集第八巻』筑摩書房。
板原伝(1980)『牛の来た道』文芸土佐編集委員会。
岡崎和郎(1999)『高知県農民組合運動史』発行者山崎裕子, 編集和田書房・月刊『土佐』編集室。
岡崎鶴子(1999)『芸術家・教育者・農民の父 追想岡崎精郎』発行社美術の図書 三好企画。
『生活者』倉田百三編集, 生活者発行所, 岩波書店発行。
法政大学大原社会問題研究所(1968)「第13回全国農民組合全国大会議事録 総本部 34/3/11~13」『農民運動資料第8号 68/3/15 準戦時体制下の農民組合(2)』。
法政大学大原社会問題研究所(1973a)「第15回全国大会報告・議案(全農総本部36/1/15・16) 高知県連報告」『農民運動資料第10号 73/3/15 準戦時体制下の農民組合(4)』。
法政大学大原社会問題研究所(1973b)「中委の議題と扱い方に関して」(全農中央常任委員会34/9)「常任委員会概括報告『協同組合的活動』」『同上書』。
法政大学大原社会問題研究所(1976a)「中央常任委員会議事録」(全農総本部, 36/2/24)『農民運動資料第11号(76/4/15) 準戦時体制下の農民組合(5)』。
法政大学大原社会問題研究所(1976b)「全農中央委員並衆議院議員協議会議録」(36/4/26)「地方報告 高知」『同上書』。
拙稿(1995)「都市一農村共生型医療利用組合運動とその時代」『阪南論集社会科学編』第31巻第1号, pp.13-39。

(2016年7月15日掲載決定)